



岡山中心市街地 落書き調査隊 隊長

岡崎 久弥 さん

パレットメモ



● 私達は、「無理なく、楽しく、謙虚に」がモットーです。関心のある方は、落書き調査隊事務局までご一報下さい。

● ファックス 086-235-3227

## 岡崎さんの体験 1

### ボランティアを始めたきっかけは？

3年前、近所のお寿司屋さんの壁に巨大な猥褻落書きが書かれ、あつげにとられたのが、活動のきっかけでした。それから市街地の落書きを調べてみて、街じゅうが落書きで溢れかえり、犯罪の空気が充満している現状に愕然とし、街の人々の悲しみに触れて、「後に引けなく」なってしまった、というのが実際のところでした。

「落書き一斉消去方式」など岡山発の活動は、今でこそ、東京・下北沢など全国規模で展開され、理論的裏づけも与えられていますが、実は、落書き被害の甚大さに義憤を感じた、町内会・商店会の会員や、ボランティア、警察官、自治体職員、マスコミ関係者から議員に至るまで、広範な市民が、まさに全身ペンキまみれになりながら、試行錯誤のなかで生み出した御近所の妙案なのです。

### どうやって活動に結びつけたのですか？

調査の結果、空洞化と高齢化等による地域自治・教育能力の低下と、街への社会的無関心の増大が、様々な「スキ」を生み、それが、落書きとして目に見える形ではびこり、重犯罪の温床となっているのです。しかも落書きは小さな店舗や高齢者のお宅などに集中し、「弱いものいじめ」という犯罪特有の原始的メカニズムが見えてきました。落書き放置の現状は、放置され疎外された街の悲しい叫びのように見えてきたのです。

しかし、いざ消すとすると、話は違います。落書きは一定の規模でまとめて消さなければ、いたちごっこになってしまうことがわかり、短時間で大量の落書きを消す「一斉消去」という方式に行き着いたのですが、その中で大発見がありました。子供や若者が落書き消しを心から楽しむ姿です。子供たちが傷ついた街を、汗を流して楽しく修復することで、「自分たちの街は自分たちが守る」という気持ちが芽生え、消した壁を気にして見ることで、街への愛情を自然に育み、卑劣な犯罪を許さないという自覚を新たにします。得がたい体感教育になると思いました。

1

## 岡崎さんの体験 2

# Part 9

### どんな活動をしているのですか？

私達の活動に、難しいことは一切ありません。日常はカメラをもって街の落書きの動向を監視し、エリア毎の落書き被害マップを作成して、傾向分析をもとに対策を立案し、地域への根回しをして、様々な機関と連携して一斉消去作戦を行います。他にもPTAや社会教育団体と連携しての落書き対策啓発講座、「落書き戦隊ケセルンジャー」とジョイントしてのイベントなど、結構多岐にわたっています。最近では岡山県との協働で全国初の「落書き対策地域活動マニュアル」を出版し、街づくり活動への応用が期待されています。

今、我が国は、犯罪が急増しています。色々な背景があるのですが、凶悪犯罪現場に落書きが放置されている現状はテレビ画面でも容易に確認でき、報道関係者からも問題点が指摘されています。犯罪に関して市民はとかく一方的に受身の立場に追いやられがちです。しかし、落書き問題は、犯罪や街の危機に際して、いち早く危険信号を発し、市民が具体的に取り組むことができる身近な題材です。落書きへの日常的なウオッチそのものが防犯活動の一つとなります。それが今では「人づくり」に新たな展開をはじめました。落書き対策は地域コミュニケーション・地域教育力の再構築手段の一つといえるかもしれません。



全国初「落書き一斉消去作戦」スタッフ記念写真



県民200名が参加した落書き一斉消去作戦の活動風景



子ども落書き調査隊の活動風景

「落書き消して、すごく大変な作業だと思っただけで、けっこう楽しいじゃないですか」落書き一斉消去活動での参加者全員の感想です。この3年間で消去回数は19回、延べ1,100名以上のボランティアの方々が、1,000箇所以上の落書きを消し、自主消去の輪がそれ以上に広がっています。一時は「日本の落書き県」とまでいわれた岡山が、今では、「落書き犯罪対策先進都市」に様変わりしました。

体験談

募集

講座・イベント

お役立ち情報

「やりたい時に、やれるだけ。落書きを楽しく消そう」これが私達のモットーです。市民の皆様と共に喜びを分かち合える活動をしていきたいと思っています。これからも宜しくお願いします。

2